発明文化論〈第52回〉

丸山　亮

イタリア文化の重層性

日本はずっと弥生文化を基本に発展したようにいわれてきたが、最近は、それ以前の縄文文化が現在にも深い影響力を持っていることに注目が集まるようになった。地中海文明の長い歴史の中ではぐくまれたイタリア文化の場合はどうか。ローマからミラノに北上する駆け足の旅の中で考えた。

ローマの近郊にあるティヴォリ。ここはローマ帝国の皇帝だったハドリアヌスの別邸が遺跡として残っており、ユネスコの世界遺産に指定されている。ハドリアヌス帝は広い帝国領土を旅行して印象が強かった景観を、この地に再現しようとした。アテネやアレクサンドリアの宮殿、劇場、庭園などが一所に集められ、テーマパークの様相を呈している。水を湛えた環状の溝を建物の中に持つ「海の劇場」や、エジプトの門前町を再現させたといわれる細長い池の周りの「カノプス」が比較的よく残っていて、見ごたえがある。発掘は15世紀末から続くという。ローマ時代、美の規範はギリシャにあった。このためギリシャの彫刻が大量にコピーされたが、建築もローマに大きな影響を与えたと思われる。

ローマの北西、列車で一時間ほど行った海岸に近い町タルクィニアには、ラテン系の文化以前に遡るエトルリアの地下墳墓があって、ここも世界遺産に指定されている。紀元前の10世紀から２世紀にかけてのもので、墳墓群が死者の町、ネクロポリスを形づくっていたらしい。エトルリア人は高度な文化を持ち、その多くはローマ人に伝えられた。地下墳墓は装飾壁画で彩られ、絵柄からは当時の人々の生活ぶりがうかがえる。食事や音楽や踊り。これらは現在のラテン人の気質を表すのに欠かせない要素だが、エトルリア人たちがまさにそうだったことが、壁画から見て取れる。また、出土品の壺などからは、多神教の世界観が、ギリシャ、ローマと共通しているように見受けられる。

タルクィニアでは、町の中心にあるホテル・サンマルコを宿とした。名前からしてキリスト教にゆかりがありそうだが、事実ここは1600年創建の修道院を改造したものといい、窓からは鐘楼が望まれる。そして、このホテルの向かいにあるのが国立エトルリア博物館で、建物は中世僧侶の館がそのまま博物館に転用されている。イタリア文化の重層性は、このように石を建材にするところで可能になっている部分が多いと思われる。もっとも、直接目に触れない宗教感情や、エトルリア由来の言葉をカフェやレストラン名とするところまでが、こうした重層性の一端なのだ。

トスカーナ州の丘陵地にある古い町シエナからバスで１時間ほどなだらかな起伏の田園風景を楽しみながら南へ行くと、小山のてっぺんにある町、モンタルチーノに着く。ここのブルネッロ・ワインは深みのある赤を湛えた、こくのあるワインでうまいが、現地でも生産が限られているためか、結構な値段で売られている。エノテカと呼ばれるワイン・ショップでその味を楽しんだ後、近くの博物館を訪れた。この博物館も古い教会の転用だ。この地は有史以前の石器時代から人が住んでいたといい、近年、考古学的な発掘によってその様子が少しずつ明らかになってきた。博物館の一部は紀元前の展示に当てられている。エトルリア時代の住居や生活関連遺物の展示はもちろんあるが、それをさらに遡る先史時代の石器に目が行った。これらは世界各地の同時代の出土品とさほど違わないことに驚かされる。身近にあるものに簡単な手を加えた石器などは、どこでも同じような形態を取るのであろう。しかし、イタリアはその後の時代を通じて周辺文化も取り込みながら、今日世界に誇る独得で厚みのある文化を築き上げたのだ。今度の旅はそれを確認するものだった。

（まるやま　りょう　共生国際特許事務所　弁理士）